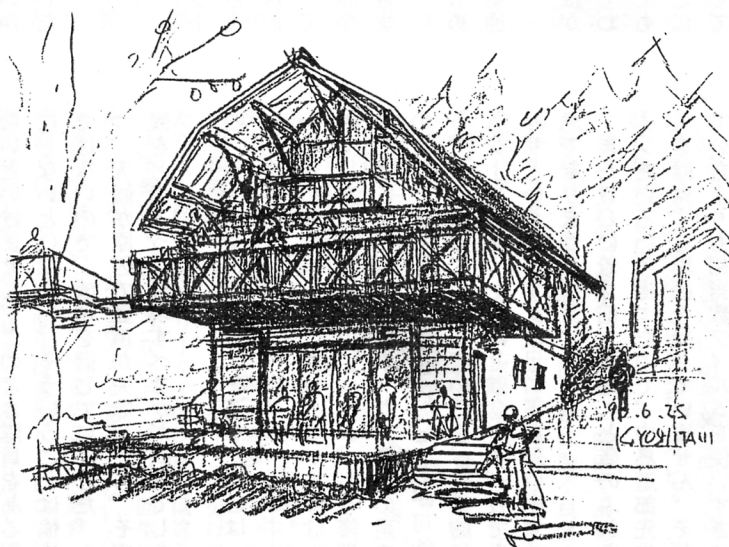


Newsletter

MAR. 1999

<http://www.aack.cr.jp>

笹が峰ヒュッテ・改築めざす



完成予想図

昨年末、皆様の御手許に「京大笹が峰ヒュッテ改築についてのお知らせ」及び「資料」が届けられており、現建物がおもはや使用に耐えられなくなったこと、改築委員会が改築案、維持管理等につき協議を詰めていることが知らされました。その後免税募金の道が開かれ、近く寄付申込書を添えて募金の案内書が各位に送付されようとしています。正式書類を御覧の上、御援助方よろしくお願い申し上げます。

この春雪解けの頃、着工の手筈となっています。皆様方の絶大なる御協力に基づき、工事完成、竣工式を迎えられますよう念願して止みません。掲載の完成予想図は、まだ立案中であり、変更されるかも知れません。念の為。

(文責 新井 浩)

潮田カメラマンとチヨゴリザ

平井一正

映画「花嫁の峰チヨゴリザ」は昭和三四年夏に東宝映画として封切られ、文部省特選として全国の小、中、高校生に多大の印象を与えました。また山岳ドキュメンタリー映画としてもその画面のきれいな、山の壮大さ、構成のよさなどで出色のものであらうと思われまふ。今はビデオ撮影機で、ディレクター、カメラマン、アシスタントカメラマンなど三人のチームで撮るのがふつうですが、当時は三キロもあるアイモで、しかも撮影、録音、監督、照明などひとりでやらなければならぬことを思うと、カメラマンであった潮田さんの苦労がしのべれます。幸い登頂後四〇年たった現在もお元気なので、当時の感想や苦心談などを記録にとどめておきたいと思ひます。取材しましたすべてを紹介するには紙数の問題がありますので、その一部を紹介いたします。

一・潮田さんがチヨゴリザ隊のカメラマンとして選ばれた経緯について

はじめは映画「カラコルム」の林田重夫さんと共にカラコルム学術調査隊に同行した中村誠二さん(故人、劇映画のカメラマンで松竹出身)が行く事に決定していました。彼は当時歯が悪いということでした。彼はなんとしてでも彼をAACK隊に参加させたく、当時の金で二〇数万円をかけて彼の歯を直しました。

しかし実は彼は高所恐怖症だったので、社をクビになっても行きたくなかったのです。日映の親会社の東宝としては、A A C Kに参加料として多少のお金をだしている関係上、作品を成功させ全国の東宝系映画館での上映をねらっていたため、誰か行く必要があります。他に早稲田大学山岳部出身の若いカメラマンも在籍していたのですが、ひとりでディレクタもかねての仕事となるとカメラマンなら誰でもいいというわけにはいきません。当時私は撮影デスク（撮影課長）をやっていました。潮田は劇映画の経験は全く無いけれども、今まで仙台支局長、名古屋支社長などをやってきたので、なんとかやるのではないかなというので、まあ半ばヤケクソで私に決定したわけです。

二、何が一番心配だったのですか

最大の心配は自分の健康でした。アシスタントでもいれば何とかありますが。高山病の怖さを知らなかったの、自分が高山病にかかるとは思っていませんでした。単板ながらスキーはやっていましたが、登山は全く素人でした。しかし戦争中は従軍カメラマンとして一日四〇キロは歩きまわしたので、足には自信がありました。

それと技術的なことでは、この時、世界はじめての試みとして三五ミリのフィルムを使って望遠カメラで登頂を撮影することにしたのですが、一眼レフと違うので、カメラのファインダーの像が正しく撮影されているのかどうか現像するまでわからない。五〇〇ミリの望遠なので、少しでもずれていると何もないところを写していることになりま。望遠レンズは内地でちゃんと調整して

もつていきましたが、輸送途中で狂うこともあり、これは本当に現像するまで心配でした。

またもうひとつ、フィルムのキャパシティが心配でした。補充がきかないため、最後まで何が起こるかわからないので、残しておく量が心配でした。

三、登山が失敗したら映画にならないが、もしそういうことになったらどうしようと思いましたが。

カメラマンとしては、もし登山に失敗したら、その原因をはっきりと示して、ストーリーを作らないといけません。このとき隊員をある程度悪者にしないといけない。そういうことは愉快なことではないので、成功を信じていました。もうひとつ、天候が原因で登頂が失敗したら、その悪い天候をどのように表現すべきかが問題でした。

四、シャッターチャンスを見逃したことは

一度芳賀さんが、「潮田さん、いまポータが自分の足の裏を糸と針で修理していますよ」というので、あわてて飛んでいったが、もう修理が終わってどこかへ行ってしまった。彼らの足の裏は靴のように丈夫なのでそういうことが可能でしょう。その撮影に成功していたら、世界的に興味あるシーンであったのにと残念です。今でもチヨゴリザといえばポータの足の裏を思い出すくらい残念でなりません。

またB Cに着く前、現地人と隊のふれあいのシーンをいろいろ撮った中で、中島道郎先生が現地人を診察する場面を撮っていません。それは考えていたよりも相当数フィルムを使いすぎていた為

に、我慢して撮らないでいました。撮りたいネタを我慢して撮らないのは、カメラマンとしてはとても辛い事でした。

五、当時は撮影機もアイモでしたが、それに関して教えてください。

あれは電池式でなく、手巻きのものでした。それでいっぱい巻いて三〇秒しか撮れません。アイモは正式には二五秒しか撮れないようになっていきます。それはスプリングの頭と終わりを使用せず、中だけ七〇%くらいを使用するようにストッパーが付いていますが、私は自分でそのストッパーをはずして 三〇秒撮れるようにして持っていました。

フィルムは一〇〇フィートがロールです。これは一分七秒でなくなる。いい場面の途中でフィルム切れになったら困る。そのために苦労しました。全部で三四〇〇フィート撮影しました。重さは一〇〇フィート入って一缶四〇〇グラム位です。全部で三五〇〇フィート持っていました。

なので一四〇キログラム位だともいいます。ついでですが、アイモにはレンズが三個ついているターレット式の「つの型」といわれるものと、レンズ一個の「シングル型」とがありますが、この二台をもつていきました。だいたいB Cまでは前者を使用し、B Cからは後者を使用しました。

フィルムはイーストマンコダックですが、ASAは三二で感度が悪く、夕方からの撮影はあきらめていました。そしてそのかわりフライヤー（照明用火火）を用意しました。これは一本で三〇秒しかもちません。

六. 録音はどうされましたか

いわゆるデンスケといわれる携帯用テープレコーダがでる以前にソニーが出した製品を持っていました。それを肩にかついでポータの音楽や会話などを収録しました。BCから山に向かうポータのお祈りの声などは、録音がなければあの真剣さはつたわりませんね。まだカセットがなく、ロールのテープをいちいちセットするタイプでした。BCから上は録音機は重いので持っていきませんでした。

七. 隊員が高山病で倒れていきましたが、そういうところは画面にありませんが…

桑原隊長からはじめにきびしくいわれました。「絶対に隊員が倒れているところ、病気になる所とところは撮影してはいけない」と。それで岩坪さんなどが顔を腫らして下山するシーンや、帰途、脇坂さんが腹痛でポータにかつがれておりたところなどは撮りませんでした。

隊長のおっしゃることはよくわかるのですが、もし撮れるものなら、せめて名前を伏せて後ろ姿だけでも撮りたいシーンでした。訓練をつんだ隊員でも簡単に登れる山ではないのだということを見て見せたかったシーンでした。

我々ドキュメンタリのカメラマンは、「一〇〇のナレーションより勝る本物の画を撮る」ということを目標にしていますが、それこそ一〇〇のナレーションより勝る本物の画だったからです。

八. 一番印象に残っているシーンはどういう場面ですか。

映画の中にはご存知の通り、いくつかのピーク

が必要です。この作品の最大のピークは何と言っても登頂シーンです。五〇〇ミリの望遠レンズのカットを含めて、頂上で撮っていただいた一六ミリのカットはすぐれた逸品でした。特に平井さんの撮っていたいた画に安定がない、安定がない画がこんなにもすばらしいとは思いませんでした。誰もがこの画をみて、そう感じたはずです。(ちなみに頂上に持つていったカメラはベルアンドハウエル製の弁当箱くらいのカメラで約二キロ。映画では一六ミリから三五ミリに拡大して写したので特に安定がとれていない。—平井注) もしキャラバン中にあの足の裏が撮れていれば、これも印象に残るひとつのピークになったはずですが。もちろんヘルマンブルーのテント発見とその遺品回収もひとつの大きなピークでした。

登頂の瞬間、ついに登頂した。AACKバンザイ、チヨゴリザ遠征隊バンザイ、お二人ご苦労様でした、私は撮影しながら心の中でそう叫んでいました。必ず登頂してくれると信じていましたから。しかし現実に登頂できた今でも、私はまだバンザイではない、私のバンザイはラストカットを撮り終わったときだと自分に言い聞かせていました。

すなわち最後のピークはラストカットです。最後にBCから一列になって引き上げていくポータと、その背景にそびえるチヨゴリザの頂上をみせるこのカットです。最後にBCを引き上げる日に果たして晴れてチヨゴリザが見えるかは、全く予想がつきませんから。幸い晴れて、これを撮りおわったときほどガツクリきた時はありませんでした。あの五〇〇ミリの望遠レンズのカットは現像してみないとわからないし、平井さんにお願

いした頂上の分はどうだろうか、などなどすべてが終わったガツクリでした。

九. チヨゴリザの映画のシーンでここだけは自信作という場面は？たくさんあるでしょうが、しいてあげるとしたら。

技術的にはあの五〇〇ミリの望遠レンズのカットです。スタートしてお二人が登っている所でうまい構図で止める、または頂上で止めるのに、画面で頂上の上の空があきすぎて少なすぎてもNGで、これは自分でもよくやったと満足しているカットです。作品として見ている方々はごく当たり前のカットとしてご覧になっていると思います。が…。

一〇. アタック隊が登頂成功してC3に帰ってきたときの加藤さんの表情が実によかったですが、こういうシーンをとるのは一瞬の判断でできるのですか

一瞬の判断どころではありません。この瞬間を撮る為に、特に待ちに待って構えていますので、もしこのときレンズの目に少しでも邪魔なものがあれば、蹴っ飛ばしても必ず撮る、ニュースカメラマンの腕の見せ所です。加藤さんの表情はまさに「本物」の強さです。

一一. あとの編集で苦心されたことはなんですか。

編集についてはトップタイトルにもありますが、伊勢長之助さんが担当しました。今は故人となりましたが、構成、編集については当時日映の中でもピカ一でした。「カラコルム」も彼が担

当しました。「チヨゴリザ」が社会にでて一応の評価を頂いたのも彼の見事な構成、編集によるものと確信しています。帰国後の日本での追加撮影も彼の構成によるものです。

私が遠征隊に参加して貴重な映像を撮れたのは、隊員各位の並々ならぬ協力のおかげで、決して一人で撮れるものではありません。その貴重な映像を、ちょうど見事なフランス料理に仕上げるシェフの様に、立派な作品に仕上げてくれたのは彼の功績だと信じています。

一二、この映画は文部省特選にもなり、また国際的にも評価を得てトロントでの国際山岳映画祭で二位になりましたね。一位はたしかレビュファの「天と地」という岩壁登攀の映画でしたが。

受賞した記念としてそのとき送られてきたなかなか立派なシルバーのエーデルワイスの置物が、今でも日映にあるはずです。

一三、およそ二か月も一緒にくらし、チヨゴリザの隊長、隊員の印象はいかがでしたか。参加する前と後でどうでしたか。忌憚のない意見をきかせてください。

私は今まで一匹狼での仕事が多かった為に、はじめの方にお会いして一〇分か一五分お話をすると、大体その方の輪郭がわかるように思います。隊長、副隊長、隊員の方々に初めてお会いした時の感じが、最後までそのままでした。正直申し上げて、皆さん山男らしくない山男という感じがしました。それは四〇年たった今でもその感じは変わりません。

一四、潮田さんがザイルを結ばないで氷河を歩いておられて、加藤さんにこっぴどく怒られていたこともありました。また帰りにザーク（羊の皮袋）で川下りをするときに、桑原隊長が「潮田にカメラをもたせたら何するかわからないから、カメラをとりあげて乗せよう」といわれた。潮田さんは、「カメラマンがカメラをはなして万一のことがあったらわらわれる、絶対にとりません」と誓約してザークにのらせてもらったことがあります。撮影にもっと協力してくれてもいいじゃないかという不満はありませんでしたか。

山の怖さを知らなかった私を皆さんからご覧になれば、無茶な奴と感ぜられるのは当然だったと思います。無茶な私を叱って頂ける有難さは今でも忘れる事はできません。

あの苛酷な条件の中で、私からお願いしたときは、誰もが快く引き受けてくれました。山男らしくない山男の方々と行動を共にできてつくづく良かった、そして恵まれた、と無神論者の私が神に感謝をしたところです。

一五、潮田さんにとってチヨゴリザとは何であったかということをごきかせてください。

ご存知のように私はインパール作戦やレイテ島作戦で、また波の荒い航空母艦の甲板に着艦できず、バリケードに激突する戦闘機などを見て、戦争を通してこの世の地獄を見、地獄を体験してきました。この世には地獄もあり、天国もあります。私にとってチヨゴリザはまさしく天国でした。日本の数万いるであろう山男が夢にまでみるヒマラヤ七千米級の山に、冬山登山を知らない私が思いもかけず参加することができ、隊員の皆様と共に

に完成できた作品として「チヨゴリザ」をこの世に送ることができました。私としてはチヨゴリザに参加できたのは、現実の天国そのものだと思っています。

一六、そのほか何でもいいので秘話なり、面白かったこと、困ったこと、嬉しかったことなどを聞かせてください。

(1) いままで後輩にはすべてのカットを撮影する時には、必ず三脚を使えと叫び続けてきた私ですが、雪の上のため三脚の水平がなかなかとれず、また BC から上ではアンザイレンのためおいそれとはいかず、大部分のカットを手持ちで撮っています。手持ちで撮る時は、息を止めて撮るのが習慣になっていましたので、息をとめてカメラをスタートして撮りおわるまでの苦しさは今でも忘れられません。

(2) 一分七秒を撮りおわると、フィルムを暗袋の中でチェンジしなければなりません。高所ではカメラを素手では触れませんので、絹の手袋を用意したのですが、袋の中のデリケートな作業なので手袋をしたままではとても出来ません。しかしもし袋の中でチェンジを失敗すると、その時の一〇フィートは画が流れてしまうので、ほとんど素手でやりました。C二、C三では寒さのため、カメラが手に吸い付く感じがしたが、ずっと素手でやりました。これは思いがけず辛い仕事でした。

(3) レンズはワイドとして焦点距離二五、三五、四七、七五、一五〇ミリ、望遠として五〇〇ミリを用意しました。また当然五〇〇ミリ以外

は直径一〇ミリ位の小さなファインダーのレンズも用意しました。これについてひとつ思ひ出があります。

BCに着く前のザークのシーンで、むこう岸についてからロングのカットを撮らねばならないときがありました。幸いにちよつとした高い所をみつ、三五ミリレンズをカメラマウントにはめ(ファインダーのレンズもファインダーのマウントにはめ)、次に来たザークを撮りおわり、つぎに四七ミリの標準レンズにはめかえて本隊に追いつきました。次の撮影にかかるとき、さつきザークのシーンで撮った三五ミリレンズ用ファインダーのレンズをどこかに落としたことを気が付きました。ファインダーのレンズがなければ、これから一番必要な三五ミリレンズが今後使えないわけです。一瞬間からさつと血がひきました。私はすぐザークを撮ったさつきの場所に引き返したのですが、なにしろ小指の先ほどの小さいレンズなので、雑草の生い茂る中でみつかるかどうかわかりません。それでも必死に雑草の中を懸命に探しまわり、ついに見付けました。一人で小躍りしたことは言うまでもありません。これはよい勉強になりました。

(4)「チヨゴリザ」が全国で上映された後、日映の入社試験を担当した時の事です。チヨゴリザを映画館でみて、このような作品を作れる社なので応募したと言った早稲田大学山岳部出身の人がおりました。その人はいま、日映の幹部になっていて、先日「早稲田の山」というビデオを制作した田村修一氏その人なので

す。

(5)私が当時も今も住んでいる所は東京でも埼玉県に近い所なので、当時は東京の田舎でした。朝日新聞東京版で隊員全員を公表したため、チヨゴリザに出版する日、社旗をつけた車が迎えに来ていよいよ出版のとき、地主で赤塚出身の都会議員をされていた方が中心となって町会の方々、近所の方々三〇―四〇人がパンザイを三唱して見送って頂きました。戦争が終わってすでに一三年が経過していましたが、感無量でした。

(6)近所に諏訪神社があります。冬山を知らない私がヒマラヤの山に登る事になったので、妻、弥生は毎朝この神社でお百度をふんでくれていたそうです。

おわりに

潮田さんの話はまだまだ続きますが、紙数の関係で一部カットしました。ご多忙の中を取材に依りて頂き、心から感謝します。

潮田さんは現在八一歳ですが、心身ともに元気です。毎年登頂記念日の八月四日前後の適当な日に、隊員、関係者が集まって酒を酌み交わして旧交を暖めています。それがもう四〇年も続いています。潮田さんはほとんど毎回参加されておられます。潮田さんがお元気なことがわれわれの励みになっています。

チヨゴリザの映画はいつみても心に大きな感動を与えます。この優れた映画を撮られた潮田さんがいつまでもお元気で活躍されることをお祈りいたします。

なお余談ですが、一六ミリ映画「花嫁の峰チヨ

ゴリザ」はAACKで保管しています。またアンナブルナ以後の遠征映画はすべてビデオにしています。

潮田三代治大正六年五月二日生。

昭和一三年一月二ニュースカメラマンとして同盟通信社入社、二一歳。

昭和一三年一月二日長崎出港上海へ。以後三年間中支南支を転戦。

昭和一五年四月同盟通信社から二ニュース映画部門が独立し日本二ニュース映画社設立。翌年社団法人「日本映画社」となる。現在の「日映新社」である。

昭和一五年一月海軍報道班員としてペナン潜水艦基地、シンガポールへ派遣される。

同一八年空母瑞鶴、さらに隼鷹に乗艦、アンダマン島敵前上陸を取材。

昭和一九年インパール作戦、レイテ島を転戦し、九死に一生の経験をする。

昭和二〇年三月帰国、結婚。以後二ニュースカメラマンとして帝銀事件、松川事件などの二ニュース映画の報道。

昭和三三年、京都大学学士山岳会のチヨゴリザ登山隊に同行し、「花嫁の峰チヨゴリザ」のカメラマンとして活躍。このとき四二歳。

昭和四五年、日映新社退職

潮田さんの戦争体験は自費出版で「私の戦争体験」(平成八年)としてまとめておられます。

東ネパール・

タムール川流域訪問記

今井一郎

はじめに

私は、九二年にネパール、クンプ地方を訪れた報告（一九九三）の中で、多くの登山者やトレッカーが入域することにより地域住民の伝統的な生活パターンが崩れ地域の汚染と環境破壊が進行している事実を、白神山地周辺村落の状況と比較対照しつつ指摘した。クンプ地域は国連ユネスコから『世界の自然遺産』に指定され、地域外から多くの人びと（観光客）を受け入れている。自然環境の保護、保全的利用を目指すはずの『世界遺産』指定によって、世界各地の自然環境が破壊され住民生活が貨幣経済によって翻弄されている事態は、早急に食い止めるべきである。『世界遺産』に限らず、国連等の国際機関がある地域を保護地として指定し、そこで何らかのプロジェクトを展開する際には、指定する前の学際的な調査と指定後の適切な運営体制の確立が不可欠であろう。

私は、九五年に続き九八年の秋にもカンチェンジュンガ、ヤルンカンの山麓部を短期間ながら歩き回る機会を得た。今回の旅は、科研費・国際学術研究（代表者・京都大学教授・辻本雅史）による「東部ネパール山岳地帯の生活と子供の教育に関する文化人類学的調査」を目的とするものだった。本報では、行動の概要を記すとともに、前記のような認識と九五年の調査を踏まえて地域の現状を捉えてみたい。

行動の概略

今回の旅のガイドは、ディアン・バードル・ライ

氏であった。アルン川の西、ボジブル付近の出身である。また、私の勤務する弘前大学・人文学部の学生である後藤識志君（三年）が、私費でカトマンズから全行程私に同行した。

一〇月三〇日 曇 ロイヤル・ネパール航空機でカトマンズ発 ビラトナガル（泊）

三十一日 曇 ビラトナガル（泊）

一〇時三十分ビラトナガル発
一時四十分プレジデント空港（スケタル）着 ボーター二名雇用。

一三時四十分プレジデント発

二日 晴 六時五十分発 一五時四十分着
チルワ着

三日 晴 七時二十分発 八時四十分着
ベトック、ポリスチエック

一三時三十分シンブワコーラ出合

四日 晴 一四時四十分セカトム（泊）
七時四十分発 一四時四十分アマ
ジラツサ（泊）

バッティの若夫人はグンサの出身で、三年前に私がグンサを訪れたことを覚えていた。三ヶ月になる赤ん坊を抱いていた。ガイヤバリ、アムジラツサ間のトラバース道は急で狭い。

五日 晴 七時五十分発 九時三十分タンゲム

一七時一十分フォレ（泊）

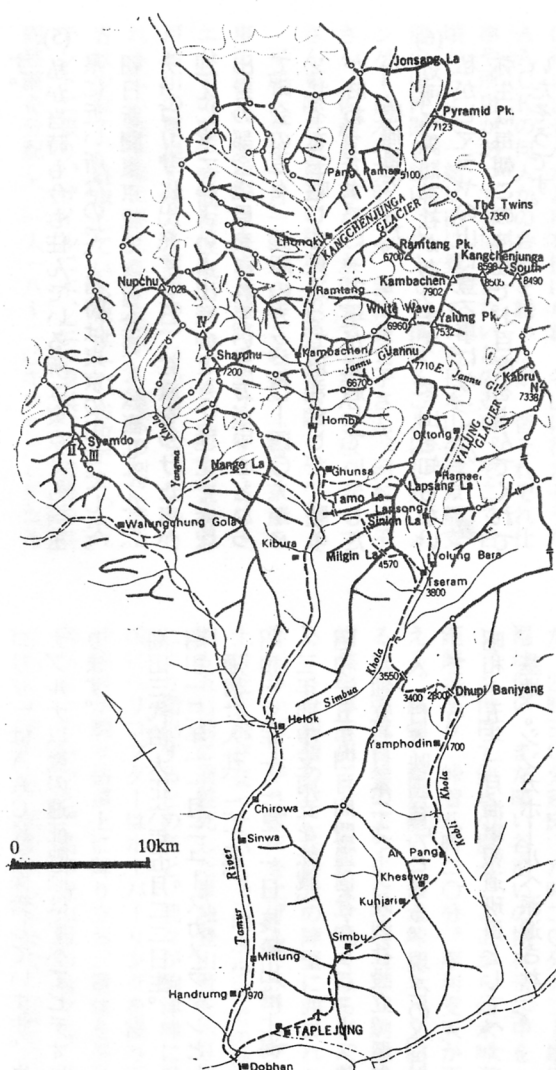
六日 晴 七時一十分発 八時四十分

グンサ（泊）

ポリスチエック。コンサベーション・オフィスの担当者に見。村びとの再会。

七日 晴 休養と村内散歩。小学校訪問。

村の女性たちのピクニックに三〇人ほどが参加した。シエレ方面の丘に登って飲食と歌舞を楽しみ



タムール川上流地域

岩と雪50号付録『ヒマラヤ・トレッキングより』

歓談した、という。

八日 曇 休養と村内散歩。

九日 曇 七時四〇分発 一二時二五分カン

バチエン(泊)

カンバチエンの手前で、数人の男たちが道路の整備工事をしていた。通行に危険な浮石を谷底に落とし大音響が鳴り響く。

一〇日 晴 集落の各戸を訪問して聞き取り調査。クンバカルナ(ジャヌー)の絶景を目の当たりにしながら早朝の用便をすませる。

カンバチエンは夏の集落であり、五、六戸が残留しているが、今月中にはグンサに下りる、とのことだ。

一日 晴 聞き取り調査。

二日 晴 八時五〇分発 一二時一五分ラム

タン 一三時一〇分ロナーク・コ

ーラ 一三時三〇分ロナーク(泊)

一五時三〇分発 一六時二〇分北

大隊調査キャンプ 一七時五十分

ロナーク帰着。

北大・地環研の渡辺二氏を中心とする調査チームがロナークの上部で調査中である、とのことなので、午後から出向いて彼らと会見した。グンサ谷の氷河地形、地質、地生生態、牧畜、エコ・ツーリズムなど調査対象は多岐にわたる。九九年度も行なう。

三日 晴 七時四五分発 一二時二五分パン

ペマ(カンチェンジュンガ・ベ

スキャンプ) 一五時一〇分ロナ

ーク(泊)

後藤君も私も体調が良かったので、トレッカーに許可されている上限まで歩いた。ヤルンカンの崇高な姿に、思わず手を合わせた。

四日 晴 八時四五分発 一二時カンバチエ

ン(泊)

五日 晴 休養。

六日 曇 七時二〇分発 一〇時三〇分グ

ンサ(泊)

七日 雨 休養

雨のためテント内が水浸しとなり夜更けロッジの部屋に逃げ込む。

八日 曇 休養

グンサで帰路用のポーターを雇うと賃金が高いので、他のトレッキングパーティからポーターを二名回してもらい雇うことにする。

九日 晴 八時三〇分発 一二時シエレ

(泊)

ツェラムからグンサに抜ける、私たちとは逆ルートのパーティを合せて五、六組が泊まり、キャンプ地は賑わう。

二〇日 晴 六時三〇分発 八時二五分シエ

レ・パス(ミルギン・ラ)

九時四五分ティトラプチェ

一一時二〇分ツェラム直上

一二時五〇分ツェラム(泊)

二日 晴 七時三三分発 一〇時三〇分トロ

ンタン 一三時四〇分デウラリ

一四時五十分ミテのバツティ

(泊)

ツェラムで泊まったトレッカーはほとんどラムゼに向い、下山するのは私たちだけだった。

二日 晴 七時二五分発 九時五分オムジ

エ・コーラのバツティ 一四時

五〇分ヤンボディン(泊)

三日 晴 七時三〇分発 一〇時ママンケ

一五時三〇分ブン(泊)

四日 晴 六時三〇分発 八時四〇分カール

バンジャン 一四時四五分

ラリーカルカ(泊)

二五日 曇 七時二〇分発 八時二五分デウラ

リ 九時五〇分スケタル手前の

小屋 一一時三〇分タブレジュン

空港(スケタル)(泊)

二六日 曇 休養

飛行機が上空までやってきたが、視界不良のため空港に着陸できず引き返して行った。

その後すぐに晴れ渡ったので、集まっていた人びとは口々に悪態をつく。

二七日 晴 九時ロイヤルネパール航空機にて

タブレジュン発 九時二五分ピラ

トナガール 一五時発

一五時四〇分カトマンズ

課題

グンサ谷とその周辺地域は私にとって九五年に続く二度目の訪問であり、今回の旅には前回の報告書(一九九五)で提起した調査課題をより深く追求する、という目的があった。

課題の一つは、タムール川上流域に住む人びとの民族性についてである。ソル・クンプ地方に居住する有名なシェルバ族とはネパールへの移入路、出自が異なり言語的にも同一ではない。タムール川流域の民族が近年になって自らのジャート(民族名)を「シェルバ」と称している、という事実注目し、私は前稿(一九九五)で彼らを「タムール・シェルバ」と仮称した。今までの調査を通じて、ネパール国内の人びとの間では自らの出自と正確に関係付けられなくともよく知られたジャート名を名乗る傾向がある、という事実が浮かび上がった。「グルン」「ライ」などの民族名である。タムール川流域の「シェルバ」にもそれが当てはまりそうである。また、タムール川流域の中でもトレップの住民は、グンサなど左岸の集落やオランチュン・ゴラの住民

とは出自や生業構造が異なる、とのことであった。タムール川への人びとの移入の経緯を辿ることは今後の興味深い課題である。

私が提案した研究課題のもう一つはグンサ谷で暮らす人びとの医学的、遺伝学的な解明であり、それに文化人類学、社会学などを巻き込んだ総合的な調査プロジェクトを前稿（一九九五）で呼びかけたのである。それには何ら反応が得られなかったが、昨年（九八年）の夏に偶然北大・地球環境科学研究所の渡辺悌二氏が九七年からグンサ谷で総合的な調査を始めたことを知った。

ネパール政府は、カンチェンジュンガ地域をWWFなどの主導により、一九九七年自然保全地域に指定した。将来的にはインド、ネパール、中国（チベット）三国にまたがる国際公園を作る、という構想である。この動きの中で観光開発が進めば、多くの人びとが入域するようになることは間違いない。それによる自然環境の破壊を招く前に地域の総合的な学術調査を行ない、環境保全策を練るべきである、という問題意識の下に渡辺氏は調査に入ったのである（渡辺、一九九八）。

彼らとは出国前に情報交換していたために、現地で調査隊に遭遇して驚く事態には至らなかったが、私が今後もタムール川流域で調査活動が続けるとすれば、彼らと頻りに連絡をとりつつ自らの調査プランを練り上げることが必要になる。北大の調査プロジェクトに参加することも不可能ではない。その前に、私自身がこれからネパール・ヒマラヤでどのような視野に立つて調査研究を続けるか、について整理する必要があるのだが、スペースの関係もあり、別の機会に譲りたい。

参考文献

今井一郎（一九九三）『世界の遺産』地域の自然と人

―ネパール・クンブと白神山地の暮らし―ヒマ
ラヤ学誌 第四号、京都大学ヒマラヤ研究会。

（一九九五）『タムール・シェルパ』との出
会い―東部ネパール、タムール川流域の調査より―
ヒマラヤ学誌第六号、京都大学ヒマラヤ研究会。

渡辺悌二編（一九九八）『一九九七年カンチェンジュ
ンガ調査報告書』北大・ヒマラヤの村と自然を守る会。

厳冬期甲斐駒ヶ岳登山

阪本公一

三十数年振りに登った冬の甲斐駒ヶ岳は、初めて
登った時と同じように感動的な山だった。

永田龍会員（ナマコ、一九七六年京大山西岳部入部）
から、本年一月中旬の三連休に甲斐駒ヶ岳が仙丈岳
に行きませんかと声を掛けられ、冬山に行きそうな
AACKの何人かの会員を誘ったが、皆それぞれ仕
事や所用があつて参加できないとの返事。そこで日
頃からよく一緒に山に登っている日本山岳会京都支
部の山仲間を誘い、六人で出掛けることにした。メ
ンバーは木村芳弘さん、津田美也子さん、河村皆子
さん、佐藤典子さん、永田ナマコさんと私。ナマコ
さんを除き全員五〇歳以上の高齢登山隊となった。

平成一一年一月一日（木）の夜二時に京都を
車で出発。途中、中央高速道路の駒ヶ根サービス・
エリアで約三時間程仮眠し戸台口に七時二〇分着。
戸台川の堰堤を越えた河原の一〇〇台くらい止めら
れる広い駐車場に車を止めたが、三連休の割に登山
者は少なく、駐車している車は一〇台位であった。
テント二張り、ザイル二本、三つ道具、食糧等の共
同装備を分配し、一人一八〜二〇キログラムになる

重荷に喘ぎながら、単調な戸台川のただっ広い河原
道を歩き始める。鋸岳は小雪混じりの曇り空で見え
ない。鋸の第一高点へのルートである角兵衛沢の出
合いに一〇時着。雪に凍った丸木橋を怖々越えて、
まだ広い河原の道をポコポコと案外早く一時に丹
溪山荘に着いた。赤河原にアイヌ・クライミングに
行くのであろう一〇数名の社会人山岳部の若い人達
が、我々を抜き去って、丹溪山荘の前で休息してい
た。割りとは楽な入山だなあと考えたのは、ここまで。
丹溪山荘から急登の八丁坂から大平山荘迄、樹林帯
の中の登りが意外と長くつらかった。先行者のトレ
ースがあり、ワカンを使わずズボで歩いた。スー
パー林道を何度か横切り、北沢峠にあえぎあえぎ到
着。北沢峠の新装の長衛荘から約一五分という北沢
長衛小屋の前のキャンプ地によたよたしながら着い
たのは、午後三時になっていた。

一月一六日（土）夜半より、冬型の天候となりこ
こ南アルプスでの天候は回復し、満天の星空となつ
た。四時三〇分起床。六時二〇分テント地出発。気
温は低い。まだ暗い谷沿いの樹林帯の中をヘッドラ
ンプを付けて仙水小屋へ。ここから仙水峠迄意外と
距離があり、峠着八時二〇分。摩利支天が正面に聳
える。風強く頬が痛い。仙水峠より、又樹林帯に入
ると、強風は嘘のようになくなった。駒津峰の肩の
樹林限界を出ると、風は又々強くなるが、突き抜け
るような紺碧の空に花崗岩の障壁に囲まれた駒の雄
姿が浮かび上がり歓声を上げる。ヘリコプターが頂
上付近を飛び交っている。仙水小屋での情報では、
四〜五日前に遭難死した単独登山者をヘリコプター
により搬出すること。我々が駒津峰に登り着く
頃にヘリコプターはホバーリングを繰り返して救
助隊員が駒ヶ岳頂上に降り立ち、遺体を吊り上げて
飛び去っていった。高齢登山隊の我々は、絶対事故
は起こすまいと、気を引き締めて、「慎重に登ろう」

とお互いに声を掛け合い、安全登山を再確認した。駒津峰からナイフリッジと岩稜が続く、非常に魅力的な山稜となる。安全登山を第一義とする我々はザイルをだすことにした。九ミリ×四〇ミリに阪本、佐藤、河村、永田の四名がアンザイレ。八ミリ×二〇メートルを木村、津田が使い、コンティニューアスで慎重に登る。駒津峰から六方石迄のナイフリッジはやや柔らかい崩れ易そうな雪であったが、六方石からは積雪量が少なくアイゼンが良く効く岩と雪のミックスした快適な岩稜となった。夏道は、右の方に摩利支天側に大きくトラバースするのだが、積雪期の今は、ほぼ稜線沿いの岩稜を忠実に登る。途中二ヶ所、ほんの二メートルだが嫌なスラブ状の岩があり、安全をきしてスタカットで登った。途中、昨日六合目小屋經由頂上に登ったと言う、下降する三人の登山者にすれ違う。「丹溪山荘から道を間違えて六合目小屋に上がってしまった、昨晩は遺体と一緒に頂上に寝るはめになって、気持ち悪かったですわ」との体談。暫くすると早朝に仙水小屋を出発した二人も降りてきた。

今日の甲斐駒は、後ろから付いてきた単独登山者と我々のみという、静かな山となった。頂上直下から又ラッセルが深くなり最後の登りは喘ぎ喘ぎの苦しい登りとなって、駒の頂上着は十三時二〇分になってしまった。

天気が悪くなりそうなら一二時には引き返そうと考えていたが、何とか持ちそうなので思い切って登ったが、私も含めてこの高年登山隊で良く登れたなあと感激のピークであった。頂上の三角点を踏んで皆本当に嬉しそう。若い永田ナマコさんも、ベテランの木村さんも甲斐駒は初めての登頂との由。雲が出てきたので一三時五〇分下山開始。

途中、津田さんの新調のアイゼンのビスが飛んで無くなり、かなり時間を食ったが、ヤバイ二ヶ所は

フィックスにて安全に下った。駒津峰に戻る頃より強烈な突風が吹き出し、ビッケルで身体のパランスを取りながら樹林帯に駆け降りた。仙水峠一六時四〇分着。仙水小屋に日の暮れる一七時二〇分に着きアイゼンを脱ぎ、祝盃用の缶ビールを買ってヘッドランプの明りのもとテント地に一八時二〇分帰着。一二時間のきついアルバイトであった。テントに入りガスストーブで身体が暖まり、アルコールが入ると俄然元気になり、話題は夜遅く迄尽きなかった。夜半より、風速三〇メートルを越えそうな強風が吹き、テントが壊れないかと心配したが、朝方には風も治まり星が出始めた。

翌一月一七日(日) テントを撤収して七時四〇分出発。登り苦労した入山路も、登頂後の今は、ルンルン気分分で戸台口には一時三〇分下山。

今回の甲斐駒ヶ岳登山は天候にも恵まれ、本当に楽しい冬山であった。やはり雪山は、楽しい。

富士山、

復活の須山口登山道

新井 浩

斎藤惇生先輩のお誘いを受け、阪本公一世話役のもと、企画世話係の裾野市山岳愛好会勝又一步氏、加藤 満氏、日本山岳会石岡慎介氏の御案内を受けた。八五年ぶりに復活した廃道の歴史をたどり、その夢を実現されたボランティア市民との触れ合いの会であった。日本山岳会会長の権威と名声は想像以上で、お供の我々は驚愕狼狽であった。

〇須山口について

須山口登山道の始まりは平安時代である(古文書あり)が、その後何度かの噴火・爆発で廃道・復活の歴史を重ねていた。明治二二年に東海道御殿場駅開設で衰退しはじめ、明治四五年に陸軍の演習場用地になってしまった。

その後、地元の渡辺徳逸氏(九八才、市立富士山資料館名誉館長、日本山岳会小島烏水初代会長と親交あり)が、昭和五年以降、須山口の復活に情熱を傾けられ、長年の紆余曲折を経て、今回何と八五年振りの復活に夢を実現された。富士を愛する市民団体の結束があり、草刈り・道標整備の協力があつて、新六合目に達するコースが復活したのである。

さらなる発展のために日本山岳会の斎藤会長に現地視察を求め、理解協力を得たことであつた。そこで会長は我々京都の山仲間を声を掛けられたと言うわけである。

〇一九九八年十二月十二日、新幹線三島駅集合。

須山浅間神社訪問(富士山三大杉の一つあり)、裾野市立富士山資料館見学、十里木高原の国府庫東詩碑(五十銭札の富士山図はここからのもの)、渡辺徳逸翁の講演(於杉山宅)、裾野市山岳愛好会との交流懇親会(於大野路旅館、市長ら四十余名出席)。

渡辺氏の抜群の記憶力で語られる富士山の歴史、開発阻止の話など、類いまれなる生き証人の淡々として述べられるお姿には深く感動を受けました。

翌十三日、宝永山へ復活道を登る。

水ヶ塚駐車場七・〇〇出発：御殿庭：宝永第一火口(標高二四五〇メートル)：幕岩：水ヶ塚一五・三〇着。

早朝の赤富士を頭上に仰ぎ、須山道の後半部を登

り始める。冬晴れに恵まれ、樹林の道を行く。振り向くと伊豆天城、愛鷹山が朝霧に浮かんでいた。アイゼンを付けることなく雪を踏んで行く。昼には宝永山火口に着く。雲一つない青空であるが寒い風が吹き抜ける。富士登山といえば五合目からのガラガラ溶岩・砂礫の上が定番となっているが、その下の裾野がcaえりみられないのはどうしたことか。昔をしのお樹林帯の道を歩いてみて、緑の季節には楽しい自然を満喫できるところと知り、改めての訪問を誓った次第です。

ところで、AAC K東西合同ハイクをここ須山口でやってはいかがでしょうか。

(参加者: 斎藤惇生、高村奉樹、阪本公一、森本陸世、秋野子弦(JAC)、佐藤典子(JAC)、絹川祥夫(JAC)、新井 浩。)

首都圏の新年会

岩瀬時郎

首都圏の今年の新年会は一月二〇日(水)に開かれました。出席者は三六名、何故か人数は毎年ほとんど変わりません。最年長は川喜田二郎先生で、最若手は平成五年卒の小林(バコヤシ)君、今年のJACのガンガーブンスム遠征隊への参加が決まっています。また、遠方より今年は藤平さん、斎藤Yさん、高村デルファさんが参加されました。

例年の如く、舟橋明賢さんの挨拶で始まり、数人の方からお話を頂きながら、八時半過ぎまで懇談が続きました。

首都圏でこのような新年会が開かれるようになって

たのは、いつの頃からだったのでしょうか。京大OBでも首都圏に勤務している者は多く、初めはそれぞれ同級生同志が集まっていたようですが、現役時代一緒に登っていた仲間にも声をかけるようになり、次第に範囲が広がっていったようです。

今のような形になったのは、私の記憶ではデルファさんが文部省の勤務になり、東京に出て来られた昭和五六、七年頃だったと思います。どのようなメンバーで集まるうかと相談したところ、あの先輩をお呼びしては、この先輩にも声をかけようと、次第に範囲が拡大し遂には舟橋先輩から西堀大先輩まで引つ張りだす事になりました。舟橋さんはAAC Kの最初のヒマラヤ遠征隊アンナアルナのメンバー、高校生の頃の私にとってはマナスル以前の遠征隊員として強く印象に残っている方でした。西堀さんには度々お話し頂きましたがある時「南極に滑走路を作り、風力発電をエネルギー源としたホテルを建てるのだ。完成したら今日のメンバーを招待するよ。」と生き生きとお話されたのを、今でも懐かしく思い出します。

以来、関東地区の新年会は幅広い層が集まるようになり、また公式の行事ではないのでAAC Kに入会していなくても山岳部に在籍していた仲間(現笹が峰会会員)には、当初から適宜声を掛けて今日に至っています。

場所は毎年新日鐵の新山谷寮で行っていますが、最初の頃は場所は決まっていまませんでした。当時は皆さん若くて元気がよく、よく飲みよく食べるのは、最後にはお決まりのライندگانスということで、店の人からは怒られ必ず出入り禁止となり、場所探しに苦労した時代もありました。新山谷寮が今日に至るまで続いているのは、ここの社員は大酒飲みが多く、酒を飲んだら騒ぐのは当たり前という風土があったので、少々騒いでも目立たないようです。も

っとも、最近が高齢化が進み以前より酒量は激減し、バカ騒ぎする事もなくなりました。また、二〇年近くも同じ場所で行なっているのに、案内状に地図を添付しなくても、大半の方が分かっているのも幹事としては便利です。

料理は初めの頃は、会席料理が多かったと記憶していますが、当日になってからの出席者の変動に対応しにくい事から、次第に鍋料理へ、そして最近では立食パーティーにする事としています。

以前より舟橋さんから、新年に一度集まって酒を飲むだけでなく、山に出掛けようとのご意見がありました。首都圏でも一昨年より、沖津キヨンさんが中心となり山を歩くようになりました。平成九年は茨城県の男体山、昨年は春に房総の高岩山、秋に伊豆の天城山、今年は二月に信州の湯の丸にスキー登山を計画しています。

また、今年の新年会では、デルファさんと、関東・関西の合同山行を奥秩父あたりで実施しようかといった話もあり、是非実現させたいと考えています。

最後に昨年春に登った房総の山について一言。全国四十三都道府県の中で、最高峰が最も低いのが千葉県です。しかしながら、房総半島の南部は隆起の最も活発な地域で、南アルプスなどの山岳地帯を上回っているとのこと。この為、山は低いが川は予想外に深い谷を刻み込み、崖や痩せ尾根を造りだしています。鹿野山の山荘から望む房総の山々はとても二〇〇〜三〇〇メートルの山が連なっているとは思えない奥深い感じがします。また、大変温暖な地域であるにもかかわらず、モミ、ツガなどの針葉樹の他ヒメコマツがシイ、カシに混じって生育しているのも珍しく、この山域の特徴です。

一度是非歩いてみては如何でしょうか。ご連絡くださればご案内します。

いまだきの いつかいせい

山田和人

「京大の学生はん」を辞めて一三年経った。三年前に大阪に転動になったこともあり、二年連続で京大山岳部のスキー合宿に同行した。役割は、スキーコーチ。今年は、最後になるかも知れない雪の京大ヒュッテ宿泊も目的のひとつであった。

ここ数年、京大山岳部は小人数化し、それに伴い山行のレベルも凋落傾向にあると言われている。一方で小人数化を一〇年以上前に経験した他大学の中には、OBの積極的参加を是として(必須なのかもしれないが)小人数ながらも活発に活動している山岳部が存在する。京大山岳部OBが大半を占めるAAC K会員諸兄は、この状況を歓迎すべきこととして受けとめはしないだろう。学生に向かって「僕達が学生の頃は……」という演説をしても互いにピンと来るものはないと思う。実際に学生に同行することで、彼らは何を思考し志向しているのか、山登りのクラブとしての山岳部を選んでいる理由は何かを知りたいと考えた。

今シーズンのスキー合宿の構成は、リーダー(四回生)、三回生二名、二回生二名、一回生二名の計六人パーティーだ。二月二六日の朝に杉ノ沢の京山荘で学生と落ち合う予定であった。京山荘では先発の二回生二名が出迎えてくれたが、肝心の本隊が到着しない。電話連絡により、どうやら一回生一名が夜行列車に乗り遅れた模様。結局、その日は京大ヒュッテへの入山を諦め、スキー場で練習を行うこととなった。遅れた一回生が練習場所(高速第一リフト終点に到着したのは一三時を回っていたように記憶し

ている。「すみません」の言葉は聞くことが出来なかった。その晩は、笹谷山荘(ベベヒュッテ)にお世話になることとした。

翌二七日前、京大ヒュッテへ向けて出発。ラッセルはなし。前日遅着の一回生が体調不良とのことで隊から大きく遅れた。午後は牧場小屋付近でスキー練習。夕方、ヒュッテに引き上げ、夕食を待っている時に、妙なことに気づいた。夕食の準備やランプへの給油は二回生・三回生がやっており、一回生は、私の隣でコーヒを啜ってくつろいだ様子なのだ。その日は黙っていることにした。

二八日は終日、牧場小屋付近にてスキー練習。一回生二名は、揃ってスキーが上手である。この日は雪崩ビーコン(埋没者探知機)の訓練も行った。搜索の模擬練習は一回生を二チームに分けて実施したが、一回生が搜索リーダーの指示とは違う方向に一人で動いていったようなので、後で二回生に聞いてみたところ、「彼は言うことを聞かないんですよ。今だけではないんです。」とのこと。昼食・夕食の準備では、やはり一回生は参加していない様子。二回生を呼んで、やらせるようにアドバイスしたが、あまり改善は見られなかった。体調不良を訴えていた一回生も夜は元気な様子で割と遅くまで起きていたようだ。

二九日は前夜、全快かと思われた一回生が体調不良とのことで再び休養。午前中、足慣らしを兼ねて火打山への登山道を黒沢の橋までトレースした。このまま雪が少ない状態のことを想定して、上級生達は橋から先のルートの偵察をしたが、その時に一回生が「この先の道はどうなっているのでしょうかね。」と質問するので、びっくりして「夏道は知っているだろう?」と確認したところ、「いいえ、初めてなんです。」とのこと。後で二回生に聞いたら、「いくらヒュッテに行くように言っても嫌だと言って行

かなかったんです。」とのことであった。食事の準備をする際に自分がどのように動けばよいか、判らない原因は、これなのかもしれない……

三〇日は笹ヶ峰ヘッアー。前日到着したOBも交えて全員で出発。前夜の降雪により、出発時は、若干のラッセルであった。笹ヶ峰ピークに到着する頃、視界が悪化した。一回生に、地図上でアイデンティファイするように言ったところ、一人の一回生は、二回生の広げている地図を覗き込んだ。思わず「自分の地図は?」と口に出したところ、彼は地図を持ってきていないのだ、と三回生が耳打ちしてくれた。黒沢を渡渉し、台地に這い上がる所でラッセル訓練に適したブナ林の急斜面があった。全員が各自でラッセルしてトレースをつけるように四回生リーダーが指示したところ、一人の一回生が、「そんなこと、できるかあ!」と叫んだ。それまでは、OBである自分が直接、注意や指示をしないように心掛けていたが、この一言には、さすがにキレてしまった。

昼頃から降雪が強くなってきたので、予定より半日早かったが、午後、一人で下山することにした。あつという間にラッセルは重くなり、ベベヒュッテに辿り着いたのは真つ暗になってからであった。

一回生のことを中心に驚いたことをかいつまんで書いてみたが、前シーズンの合宿参加時には、今年のような違和感は感じなかったように記憶している。「最近の若いモン」というステレオタイプは当て嵌まらないだろう。自分が中年に突入しつつあるがために生じる世代ギャップだけでもないであろう。AAC K会員諸兄(特に私より若い方々や普段彼らと同世代の学生と接している方々)の意見を聞きたい。その上で、京大山岳部の将来について議論できれば、と思う。

談話室

●年賀状の写真は昨秋十月鈴蘭平から望んだ乗鞍岳です。初めて登ってから六十七年が経っています。印象に残ることは沢山あります。一九三五年十一月猛吹雪に会ったこと。戦争中猪谷千春少年と一緒にスキーをしたこと等々などです。昨年は本紙に原稿を載せていただき有難うございました。(竹内佐郎 渋谷区)

▲「山の思い出」は大変好評でした。お写真はステッキ姿のお元氣な様子で、嬉しく存じました。(新井)

●日本山岳会の会長も五月までの任期一杯、登山の興隆のため努力を重ねるつもりです。東奔西走の忙しい毎日ですが、幸い胃も肝臓も今のところ温和しくしています。(斎藤惺生 長岡京市)

▲激務のほど御苦勞様です。(新井)

●昨年五月、第三回登山と高所環境に関する国際医学会議を主宰し、お陰様で大成功であったと評価して戴きました。今年は、二月に第十一回国際ハイボキシア・シンポジウム(カナダ・ジャスパー)、五月に第十九回日本登山医学シンポジウム(立山山麓)、八月に国際山岳連盟医療委員会九十九年度例会(カナダ・ウイスラー)があります。(中島道郎 神戸市)

●昨年はチョゴリザ初登頂四十周年を記念してカラコラムのバルトロ氷河をさかのぼり、かつての恋人に会ってきました。登頂した事が信じられないくらい大きな山でした。今後新しい夢をもって残りの人生を生きようと心に刻みました。(平井一正 京都市)

▲私も平井隊長ツアーに参加し、巨峰名峰に接して深く感動し、チョゴリザ遠征隊の苦勞を偲んできました。参加の皆様御協力には感謝申し上げます。(新井)

●日本山岳会の晩餐会では、斎藤会長中心のメインテーブルで、皇太子夫妻、橋龍さんと御一緒に、肩が凝りました。いろいろ御高配ありがとうございます。(薬師義美 長岡京市)

●今年は中国雲南省昆明で花の万博がありますので、梅里雪山のふもとまで行くかなと思っています。(並河 治 神奈川県)

●昨夏はキリマンジャロ登山につき御教示いただき有難うございました。お陰様でウフルに登ってまいりました。(伊藤寿男 横浜市)

●昨年は六月〜十二月の間に五大陸(アジア、アフリカ、南北アメリカ、南極)へ行きました。十二月にアコンカグアへ行きましたが、五八〇〇メートルで時間切れ、登頂はなりませんでした。(安仁屋政武 茨城県)

●年末から笹谷へ小屋へ参りました。平井、原田、饗場、安田、羽根田、田中二郎、能田、田中昌二郎、原、杉山、山田、毛利のAACKの各氏、および秋野、加藤、田中の諸氏が来しました。笹が峰ヒュッテ、赤倉山、三田原山へとツアースキーを行いました。平井先輩もツアーで二日間一緒でした。(高尾文雄 世田谷区)

▲さぞかし賑やかで楽しいスキーライフだったでしょうね。(新井)

●タクツァン募金の件、栗田氏も私もブータン訪問予定が遅れていて、一月なかばには、ようやく渡せそうです。(月原敏博 京都市)

お知らせ

○遠征隊参加

昨秋、京都府山岳連盟創立五〇周年記念として中国・拉布吉康(ラアチェカン)山群 七一〇〇メートル峰登山隊が派遣され、会員の睦好正治氏、京都大学山岳部西川大輔氏が参加されました。天候悪化の為、登頂はなりませんでしたが、貴重なヒマラヤ体験をされました。

○榮譽

堀了平氏(元AACK会長)は、平成十年四月二十九日に紫綬褒章を受賞されました。

○物故

筈目 進氏 一九九八、三、二逝去
安江安宣氏 一九九八、一二、一一逝去
吉井良三氏 一九九八、一、二八逝去

編集後記

一、七年前遭難の梅里雪山峰登山隊の遺体が、昨夏発見されたことはご報告の通りであるが、その後、遺体名確認の為にDNA鑑定作業が行われた。しかし、新たな身元判明には至らなかった。その遺灰は比叡山延暦寺阿弥陀堂に安置されている。春には、遺族の方々によって法要が営まれる。

二、会員数のじり貧化は、活動の低下を招いていると思う。現在の山岳部卒業生からは新入会員を多くは期待出来ない。とすれば、かつての山岳部仲間を勧誘するのも一つの手ではなからうか。会の隆盛のために会員諸氏の新会員獲得方の努力を要請したい。これも重要な会活動である。三月末の理事会に間に合う様、事務局にご連絡願います。

(この場をかりて以上二件 事務局吹田啓一郎) 三、ご投稿頂いた各位に、厚く御礼申し上げます。次の原稿締切りは、六月十日です。(新井 浩)

編集委員

新井 浩、吹田啓一郎、竹田晋也

発行日

一九九九年三月一日

発行所

京都大学学芸部山岳会

京都市左京区吉田本町

京都大学工学部建築系

吹田啓一郎 氣付

製作

京都市北区小山西花池町一八

(株)土倉事務所